

語り合う文学教育

2011年度・第2号

2011年5月1日

4月例会は大盛況！

三重（9日）25名・奈良（23日）15名

新しい顔も増えました。4月末現在、今年度会費を73名の方が納入してくれています。会員のみなさんが、職場の仲間や知り合いの先生を連れてきてくださるので、裾野がどんどん広がっています。

三重では、草分さんの「大造じいさんとガン」の実践報告を聞いて、話し合いました。「大造じいさんとガン」は、これまでも何度も実践報告を受け、みんなで考えてきた教材です。「卑怯なやり方」をめぐっての意見の違いもあります。

草分さんは、前書きを重視しようと思っていました。

狩人仲間が大造じいさんの家に集い、みんなが大造じいさんのまわりにいる。「それからそれへと」愉快的話をする大造じいさんの山家は、すがすがしい木のおいが立ちこめ、楽しく暖かい。笑い声まで聞こえるようだ。

大造じいさんにとって、35・6年前のガン狩りの話は、誇張もあるでしょうが、忘れられない残雪との出会いでした。たくさんの話の中で、作者（わたし）は残雪の話が心に残り、この物語を書いています。大造じいさんの心に今でも残っていること、わたし（作者）の心を動かしたものは、何だったんだろう？ それを考えていこうと授業を始めました。

そして場面の展開に沿って読んでいきました。最後の、大造じいさんが残雪を放つ場面まで読んで、もう一度前書きにもどります。

最初に、どうして35・6年も前の話をしたのか、どうして作者はこの話を物語にしたのか、と話していたので、もう一度前書きにもどって考えました。

大造じいさんは、残雪との出会いの中で鍛えられていきました。残雪をしとめるこ

とに夢中になっていましたが、仲間のガンを助けるために恐ろしいハヤブサと戦っている残雪を前にして銃をおろしてしまい、瀕死の重傷を負った残雪を生け捕ることもしませんでした。そんな自分にならなくてよかった、それでよかったんだと思っています。残雪との出会いが、狩人としてだけでなく人間としてどう生きるか、大造じいさんの生き方にまで影響をおよぼしていたのだと思います。

これが授業の大きな構想でした。

子どもたちと一緒に読んでいく中で、草分さんはこんな風に思いました。

この授業は、5年生にとって、6年生を送る会だの何だのの年度末特有の忙しさの中、笑ったり、考え込んだり、本当に楽しいものでした。意見を言うことのなかった子たちが、一生懸命話し、一生懸命ノートに書きました。ドキドキしながら、大造じいさんや残雪に引きずり込まれて読む、残雪のすがたに感動し、そして最後のすがすがしさにホッとしています。

…それでいいんじゃないかな。「卑怯なやり方」が何かを明らかにする物語ではないだろうと思いました。

そんな様子がよくわかる日記があります。

「大造じいさんは、ぐっとじゅうをかたに当て、残雪をねらいました。が、なんと思ったか、再びじゅうを下ろしてしまいました。」

この場面にかかわるサキさんの日記です。

きょう3限目に国語がありました。私は、国語は好きな時ときらいな時があります。国語を始める前は（あ～あ、次は国語かあ）とか（めんどくさいな）とってしまうけど、国語が始まって、手をあげて発表すると、国語の授業が楽しくなってきます。きょうもそんな日でした。

先生が、

「再びじゅうをおろしました、じゃあ1回目はどこでじゅうをおろしましたか？」
という質問で、みんなは43段落で、

「どうしたことかとおどろいてじゅうをおろした」

「小屋の中にじゅうを置いて、外を見た」

とか、同じ場面の同じ段落のことを言っていたけど、私はそことはちがうところだと思っています。なので、ずっと手をあげていたけど、だれも当ててくれず、先生が、

「みんな同じ意見で、つまらんなあ。」

と言っていたので、

「私はちがう、当てて、当てて」っと思って、ピーンと手をあげたけど、最後まで当ててくれず、とちゅうで終わってしまいました。

「私は、みんなとちがって、49 段落の口笛をピュピュとふいたところだと思います。なぜなら、大造じいさんはおとりのガンのピンチにパニックになってしまい、りょうじゅうをおろし、思いっきり口笛をふいたんだと思います。

それに、43 段落のところだと言っても、83 ページの絵ではりょうじゅうをちゃんと持ってるし、大造じいさんはハヤブサを見ているけど、ハヤブサにおどろいてりょうじゅうをおろしてなんかいないからです。たしかにおどろいてはいるだろうけど、じゅうをおろしてはいない、と思います。なので 49 段落です。」

というような意見を、私は発表したかったです。

当てられなかったのは、悲しいし、くやしいけれど、国語の授業は楽しいし、本当に 43 段落でおろしたなら、ちょっとくやしいけれど、自分の考えをわざわざ人と同じにすることはないので、それはそれでいいと思います。これからも国語がんばりたいです。

43 段落、49 段落というのは光村教科書の通しの形式段落のことです。43 段落は、大造じいさんが小屋から驚いて飛び出したところ、49 段落は口笛を吹いたところでは

サキさんは、銃をおろして口笛を吹いたと言いたかったのです。

さて、次の時間にこの日記を読むと、

子ども・サキ、もっと手をあげたらよかったのに～。

子ども・誰も当てたらんだんかよ。

子ども・先生がわるいんや～。

草分 T・それで、サキさんの考え、どう思う？ 再び銃を下ろした、その 1 回目は口笛をふいたときだって。

子ども・なるほど！ それでいこ！

子ども・そう言えばその通り。

草分 T・「それでいこ」じゃなくて、ちゃんと理由、言って。

たけし・確かに絵では銃を下ろしていないからです。はじめは、ハヤブサが来てどうしたとかとあったところだと思ったけど、サキさんのこと聞いて、絵でも銃を下ろしてないし、49 で口笛を吹こうとして銃を下ろしたと思います。

らいむ・私もサキさんと同じで、43 では銃を下ろしてないと思ってきました。小屋から残雪をねらおうとして出てきたところで銃を置かないし、

草分 T・置いたんじゃないよ。下ろす。

らいむ・銃を下ろさないし、たとえハヤブサが来ても残雪をねらおうとしたことにか

わりはないからです。55にハヤブサと戦っている残雪を「ぐっと銃を肩に当てて残雪をねらった」と書いてあるから、大造じいさんは、そんな時でも残雪をねらおうとしているのに、どうしたことかわからないだけでは銃を下ろさない。

ゆいか・私は最初は43で銃を下ろしたと思っていたけれど、サキさんの聞いて、やっぱり49の口笛を吹いた時か、と思いました。おとりのガンを助けようと必死で口笛を吹いたと思うから、その時に銃で残雪をねらわないから。

のむら・口笛を吹いた時に銃を下ろしたと思います。最初にも口笛を吹こうとしているところがあるけど、その時はこの作戦を成功させようとしているところなのでその時は銃を下ろさないと思います。すぐに残雪をねらおうとしているからです。だけど、49では、大造じいさんはおとりのガンを助けようとパニックになっているので、その時は、おとりのガンを見ているので、銃を構えていたらおかしい。

こうだ・のむらさんと同じで、唇をとんがらせて、さあ残雪をおびき寄せようとしているところでは、銃を下ろさず、にぎりしめています。でも、49では、とっさにあわてているから、そんな時におとりのガンにむかって銃をあげてないと思います。

草分T・サキさんが日記に書いてくれてよかったなあ。もう、ほかに意見、ない？ あわてている大造じいさんがわかってきたね。

子ども・あわてて、吹かんでもいいとこで吹いた。だから、おとりのガンがもどってきたんやから。

みなさんもおわかりでしょうが、この「再び」は、前にも一度銃を下ろしたことがあって「再び」ではないですね。草分さんは、前時の授業の終わりごろにちょっと不用意に「最初はいつ？」と聞いてしまったのです。その授業記録はこうです。

草分T・じゃあ、大造じいさんはどうしてる。

子ども・じゅうを下ろした。

草分T・おやおや、どうしてやるね。そこのところ、何て書いてある？

子ども・「が、なんと思ったか、再びじゅうを下ろしてしまいました。」

草分T・「再び」って書いてあるってことは？

子ども・2回目。

草分T・最初に銃を下ろしたのはいつだっけ？

サキさんの日記のように何人かが小屋からはい出した場面をあげました。

草分T・時間なくなったので、なんで銃を下ろしたのか、そこのところから、また次

の時間にやります。

となって、サキさんの日記が生まれたわけです。

これは、いったん挙げた銃を「再び」下ろした、ということでしょう。草分さんはおそらく、らいむさんが「銃を置く」と「銃を下ろす」をまちがえたあたりで、子どもたちの中に場面のできごとや様子が充分には立ちあがっていないことに気づかれたのでしょう。サキさんの日記にのっかかりながら、あわてている大造じいさんのすがたを描くことに重点を置いています。だから、当然ですが、1回目はいつかという方向にはまとめていません。

草分さんがそうされたのは、クラスの状況によります。この授業は三学期です。担任した4月の頃を草分さんはこうふりかえています。

たかが21人…。前任校で40人の6年生を持っていた私は、着任して5年生のクラスを担当する前、そんなふうに思っていました。

始業式の日。あいさつしてもフンという顔。ちょっとした自己紹介ゲームをすると、みんなと一緒にゲームができず抜け出していく子、すねてしまう子。中休みは、低学年を押しつけて、遊具で鬼ごっこ。ドッジボールなどの集団遊びができません。なんでみんなでルールのある楽しい遊びができないのか不思議でした。

並ばそうとしても追いかけてこが始まる、授業中は私語と立ち歩き、ノートはあまりにもぐちゃぐちゃ。何でこんなにキレルの、とびっくり。家庭訪問に行くと不満をいっばいもらう。一学期は驚くというより不思議な感じがしました。

そのうちに、一人の子どもを追いかける生活が始まりました。教室でいきなり机とイスを蹴散らし、そのまま飛び出します。

夏休みの初日は、教室で子どもたちが壊したものを片づけながら、思わず涙ぐんでしまいました。

1年間で、ここまで誠実に教材にむきあえるクラスを作ってきた草分さんの教育力にあらためて敬服します。

物語の読みの授業という観点からみると、わたし（橋本）は、例えばこんなやりとりに注目させられます。最初のうなぎつり針をしかける場面です。

草分T・それで、どんな方法？ 絵に描けるように説明して。

子ども・タニシにうなぎつり針つけて…

草分T・うなぎつり針ってわかる？

子ども・うなぎっぼい？

草分 T・へえ、それで？
子ども・たたみ糸で結びつけた。
草分 T・たたみ糸ってどんなんやろ。
子ども・太いんちゃう、ガンが暴れても切れない。
草分 T・その先は？
子ども・杭につながってる。
子ども・杭に結びつけた。
草分 T・こんな感じかな（板書）。
けいと・あたり一面に打ちこんだって書いてあるから、すごくたくさんだと思います。
たけし・杭に結んだたたみ糸は、一つじゃなくて、杭からたくさん出ていると思います。
草分 T・ああ、こうやっていくつも糸が出てること（図示）。 ふ～ん、なるほど。
どう、みんな？
らいむ・一晩中かかって、とあるから、いっぱいあたり一面にしかけたと思います。
草分 T・いい言葉に気がついたねえ。一晩やもんねえ。24 時間？
子ども・そりゃ 1 日やろ。
草分 T・一晩ってわかる？
ゆうや・夜から朝まで。
草分 T・すごいよね。
ゆうや・大造じいさんは、今年こそは残雪をつかまえてやるという気持ちがそれだけ強かったと思います。
のむら・大造じいさんは残雪をつかまえることで頭がいっぱいで、必死でわなをしかけていたんだと思います。
こうだ・一晩中と書いてあるので、大造じいさんは夜から朝までかけて、残雪を今年こそつかまえるために一生懸命やったと思います。
ゆいか・大造じいさんは、残雪が来てから 1 羽のガンもとれなくなっていたので、今年こそは何とか残雪をしとめようと考えて準備していて、たくさんうなぎつり針をしかけていたら、一晩中かかってしまったんだと思います。
草分 T・そうか、かかってしまったんだね。
ふたみ・大造じいさんは一晩中かかってやっていたけど、これで今年こそ残雪をつかまえられると思っていたので、たぶん、一晩中かかったけどあまり眠たいとか疲れたとか感じなかったと思います。

だんだん子どもたちの中に場面が立ちあがっていくのがよくわかりますね。こうなれば、ゆいかさんが「かかってしまった」という感じ方を発表したように、子どもたちは自分の読みをどんどんつくっていきます。こういうところに草分さんの授業づく

りの秘訣があるのかなと思いました。

卑怯なやり方の話し合いを含む全授業記録は、夏の日文協の研究集会で報告されま
す。お楽しみに。

奈良例会では、機関誌9号の学習会をしました。

三重でも奈良でも、その場で会員になってくれた方が何人もいます。うれしい限り
です。会員の輪が広がれば広がった分だけ、地域の様子、子どもたちの学びのすがた
が交流できます。なにより先生と子どもとの一期一会のふれ合いに多くのことを学べ
るようになります。

会員のみなさん、職場の仲間や知り合いに声をかけてくださいね。

みなさんからのお便り

たくさんの方から近況報告や機関誌第9号についてのご意見をいただいています。
事務局についた順に紹介します。

◇印は、機関誌を贈らせていただいた方で、◆印のみなさんは会員です。会員のみ
なさんには、先月の会報に葉書を入れました。年に一回は通信をお願いします。どん
なことでも結構です。葉書をむだにしないでね。

◆青木照明さん◆

いつもありがとうございます。ますます広く深く進化していく「語り合う文学教育
の会」の一員であることをうれしく思っています。

伊藤隆司さんの「古典としての読み」、言葉は違いますが同じ思いで、子どもの主体
的読みを目指して実践中ですので、大変心強く思いました。

橋本博孝さんの「授業は一期一会」、全く同感です。実践者として毎時間「教員と題
材と子どもとがそれぞれ主体として相互に関わり合う、その一回限りの成長の場」で
あることを、痛切に実感しております。

藤原和好さんの「子どもの勝手な想像の読み」論、同じようなことに実践中何回も
遭遇しています。その都度、迷い続けています。基本的には藤原さんと同じ立場なの
ですが、具体的な一つひとつの場面では、時には「勝手な想像の読み」ではないかと
思うことがしばしばです。大切な課題として模索中です。

守田庸一さんの「説明文指導でも子どもの自己を問い、その内面を読む」視点、大賛成です。「自己を読む」に同じと思っています。

◇浜本純逸さん◇

前略

「語り合う文学教育 第9号」を受取りました。有難うございました。

伊藤論文のいう「第三の道」とは、どんな道だろうか。どのような学習指導をすればよいのだろうか。この続きに期待したい。

藤原論文は、これまでの先進的な実践を集大成したものとして、新鮮味はないが手堅いまとめだと感心しました。

実践との往還によるご発展を祈る。

匆々

◆匿名希望さん◆

初めて担任した子どもたちが卒業しました。卒業生の一人一言で、ある子がこう言いました。

「核兵器をなくしたい。中西さんのことばを聞いて、世界はまだ平和ではないことを知りました。」

「平和の大切さがわかった」は、よく聞く言葉ですが、世界は平和ではないというのは重いですね。6年間で学んだことがこれかと思わされる（もちろん彼の学びが浅いという意味ではない）現実に悲しくなりますが、だからこそ学ばなければならないのだとも思います。彼のことばは、残念ながら今の世界を的確に表していると思いました。

いつか、「世界は平和になった」、せめて「平和になってきている」と子どもに言わせることが、夢になりました。

※中西さんというのは広島修学旅行で被爆体験を話してくださった方です（橋本）。

◆馬場重行さん◆

『語り合う文学教育』第9号拝受しました。ありがとうございます。

ご高論「物語の授業と自立」、刺激的な好論と存じます。末尾に書かれた〈公共性〉の問題、原発事故の混乱続く現在、まさに必要とされる重要課題だと思います。

米沢は、大きな被害もなく無事でしたが、原発の余波は大きく、今は新入生の対応に追われる日々です。早く落ち着くことを祈るばかりです。不尽。

◇大槻和夫さん◇

このたびの大地震、大津波、福島原発事故の被害に遭われた方々には、お慰めの言葉もありません。この大被害との闘いは、被災地の方々はもちろん、私どもも含む国民すべての闘いです。この闘いには、国内のみならず国外の方々からも支援が寄せられていますので、被災された方々には、希望を持って再起してくださるよう祈るのみです。

さて、今回も『語り合う文学教育』第9号をご恵投くださいまして、ありがとうございました。とりあえず、伊藤、橋本、藤原、守田各氏のご論文のみ拝読いたしました。それぞれのご論文には共感するところや学ぶことが多く、厚く御礼申し上げます。

ないものねだりの欲を言わせていただければ、子どもたちが物語なり小説なりを読む過程で、子ども一人一人の中にどういう文学が成立してくるのかを、どうしたら明るみに出すことができるのか、また子どもたちの中に成立してくる文学とは具体的にはどのようなものなのかを、授業分析の中で明らかにしていただければと思います。今後ともよろしく願いいたします。

新年度、皆様の一層のご活躍をお祈り申し上げます。

◆小谷潤子さん◆

いつもありがとうございます。

退職して5年目となり、同期（三重大学 21 期）の皆様はめでたく定年となりました。何人の方が 60 才まで続けられたのでしょうか。恩師藤原和好先生にはおかわりありませんでしょうか。

今日、堺の小学校と市の建物には市の旗と日の丸が半旗で掲げられていて、ぎょつとしました。「強い日本」「がんばれ日本」のCMにも違和感をもつてしまいます。こんな時代の「教育」の役割を、公立学校の役割を、学校をやめた一人として、今、考えているところです。

◆村上呂里さん◆

いつも「語り合う会」のおたより、楽しみにしています。ハッとさせられることが多々あり、とてもありがたいです。授業でも活用させていただいています。（メール）

◆武村俊志さん◆

いくつもの引っ越しを重ねました。娘は三重大へ、私たちは教員住宅へ。長男は熊野の家に留まり、みんなそれぞれの道を歩み始めた4月。

私は、最後の二年間も同じ学校で紀南の教育の向上に励んでいます。学びの共同化を図り、公教育の回復めざしやってみようと考えて、ラストスパートをかけます。今までの体の中にある民主教育の糧を、新しい学びと共同させて、接点を見つけて生き抜きます。みんな、元気で！

◆岡本みずほさん◆

ご無沙汰しております。いつもご連絡ありがとうございます。

奈良教育大学教職大学院、岡本みずほです。みなさま、お元気でいらっしゃいますか。

最近、学びの軸がぶれてしまい、なんだか迷宮入りをしてしまいました。そこで、リセットをしてもう一度、一から組み直してみたく、今年度は教職大学院での学びをストップしています（休学）。

新たな気持ちで、自らの速度で、納得のいく研究をしてみたいと志だけは高く持ち、しかし4月になり、未だ一步も踏み出せていないまま、家族と楽しくたわむれていません。

23日（奈良例会）は、朝から柳生に行く予定をしております。遅れても顔を出したいと思っています。今年度もよろしくお願いします。

◆小池真人さん◆

ごぶさたしています。いつも会報をありがとうございます。

私は、今年度も支援学級の担任になりました。もう五年目になります。その前年も理科専科でしたので、もう六年も国語の授業から遠ざかっていることになります。これにはがまんできず、去年は若い先生の教室を借りて詩の授業をさせていただきました。子どもたちの発言をもとに担任の先生と話し合うと、その子なりの感じ方や生活が見えてくるので、やっぱり語り合う文学の授業はいいなあと思っています。

辰野祥子先生が、ひょんなことから枚方の新採（?!）教員として来てくださり、びっくりです。

事務局から

地震と津波から2ヵ月が立ちました。テレビで漁師さんが、「地震津波だけだったら、今頃は漁に出ているのに」と言っていたのが心に残ります。放射能汚染の先行きはまだ見えません。

教育は何ができるのか。わたしなりに真剣に考えました。被災地の子どもたちを訪問することもできるし、先生たちと連帯することもできます。それらはもちろんやろうと思いますが、何より大切なことは、目の前の子ども青年をまっとうな自立に向かうよう教育する、励まし続けることだと思い至りました。彼らが、いろんな子ども青年がいますが、何と言っても次の社会や地域の担い手になるからです。教育は未来を創るいとなみだと、若い頃と同じように今も思っています。

5月例会は

☆14日（土）三重例会

午後2時半～5時
三重大学教育学部4階国語教育ゼミ室
実践報告・島影千琴さん『ふきのとう』

☆28日（土）奈良例会

午後2時～4時半
奈良教育大学附属小学校
実践報告・菱井一宏さん『モチモチの木』

◇語り合う文学教育の会会報◇ 文責＝橋本博孝
連絡先 514-8507 津市栗真町屋町 1577 三重大学教育学部
国語科教育研究室（橋本博孝）
メールアドレス hiro3614@edu.mie-u.ac.jp
電話 059-231-9210